

2022.4

春夏

No.114

思文閣出版

# 鴨東通信



◇ 日常語のなかの歴史 27  
おぼろづき【朧月】

◇ 玉澤春史

◇ ていいたいむ  
今、ジャポニスムを考える

◇ 高木陽子 ◇ 村井則子  
◇ 高馬京子 ◇ 藤原貞朗

護法善神

◇ 伊東史朗

『1873年ウィーン万国博覧会』

——日頃からみた明治日本の姿——刊行に寄せて

◇ 宮田奈奈

## エッセイ

書をめぐるカンバセーション

——『現代美術史における前衛書のリポジショニング』——  
刊行に寄せて——

◇ 宮津大輔

消えゆくメキシコ漫画の歴史と

資料保護——メキシコのイストリエタ博物館——

◇ アルバロ・エルナンデス

◇ ミレニアル世代の研究レシビ 1

「永遠の都」から「日本皇帝の城下」へ

——あるポルトガル人司祭の旅路を追って——

◇ 阿久根晋

◇ 史料探訪 75

二河白道図

◇ 郷司泰仁

ジャポニスム学会編

# ジャポニスムを 考える

——日本文化表象

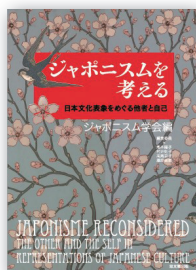
をめぐる他者と自己

編集委員＊高木陽子・村井則子・高馬京子・藤原貞朗

4月刊行

A5判並製・三五二頁／定価 三、五二〇円

ジャポニスムとは、19世紀後半にフランス近代画家等が積極的に日本趣味や美意識を取り入れた文化現象を主に指してきたが、近年では「世界に向けて発信された日本文化」といった、越境的な時空で展開する日本文化表象および受容を広く示す言葉として流通し始めている。近代美術史や近代文学研究のサブフィールドとして捉えられてきたジャポニスム的な現象や表現、そしてその評価と批評には、今日のグローバルな文化における「日本」の座標を理解する有益な手がかりが多く含まれている。本書の狙いは、日本の外からあるいは日本の外を意識してイメージされた「日本文化」を研究する問題点と可能性を、ジャポニスム研究をリードする学者らが提起することにある。



## 目次

序 ジャポニスムを考える（高木陽子・村井則子）

### 第一部 ジャポニスム研究のはじまり

- 第1章 ジャポニスム研究の展開——斜かいから眺めた回顧（稲賀繁美）
- 第2章 西洋美術史におけるジャポニスムの周縁化について——タレグ・トーマス（南明日香）
- 第3章 近代日本における美術史上の「ジャポニスム」への認識（馬淵明子）
- 第4章 日本人にとってのジャポニスム——彼らはそれをどう受け入れたか（馬淵明子）

### 第二部 ジャポニスムの主体としての日本

- 第5章 もうひとつの博物館としての農商務省商品陳列館——殖産興業とジャポニスム（石井元憲）
- 第6章 日本人がつくったジャポニスム・イメージ——一九三〇年代の国際観光局のポスターから見えてくること（木田拓也）
- 第7章 ジャポニスムから「日本主義」へ——野口米次郎の浮世絵論と浮世絵詩を中心に（中地孝）

### 第三部 ジャポニスム研究の越境性

- 第8章 エルネスト・シエノーの美術批評再考——英仏文芸交流からジャポニスムへ（フワイ・パッシン）
- 第9章 朝顔をめぐる英語圏のジャポニスム——ガーデニングから禅まで（橋本順光）
- 第10章 *Eclogue* から *Studio* へ——フランスメディアにおいて構築、「継承」される未熟なかわいい日本女性像（高馬京子）

### 第四部 現代とジャポニスム研究

- 第11章 拡散するジャポニスム、模倣される《ラ・ジャポネーズ》——日米比較から見えること（村井則子）
- 第12章 ジャポニスム研究のレンズでみる現代——グローバル化する贈物を事例に（高木陽子）

あとがき 藤原貞朗

アンケート ジャポニスムとはなにか？

参考文献／索引

表示価格は税込

日常語のなかで、  
歴史的語源や  
エピソードを取り上げ、  
研究者が専門的視野から  
ご紹介します。

# おぼろづき 朧月

春霞が立ち込める昼が過ぎ、夜も更けるとぼんやりと見える月、という言葉や並べると、春の季語として風流に思えてしまう。朧という漢字はぼんやりとした様子を示す龍の字に月偏を加えてできている。さて、朧月の色は、と聞かれたらどう答えるだろう。霞とはいったが、この時期に月をぼんやりとさせる原因の一つには黄砂がある。黄砂などにより光の散乱が起こり、これが酷くなると月どころか昼間の太陽まで青白く

見えてしまうことがある。青い太陽、というのは砂の大地である火星で見られるが、現象としては黄砂によって見られるものと同様の現象と考えられている。火星の大地に降り立った探査車が送ってきた写真には青い夕焼けが映されている。写真の様子から火星大気の状態を探ることもできるが、それはそれとして荒涼とした大地と青い夕日は幻想的にも見える。

また、月の周りに虹のような環が見えることがある。これも大気中の氷が光を反射・屈折させて起こ

すものであり月暈（げつうん、つきがさ）と呼ばれている。

このような大気光学現象には様々なものがあり、虹はその最たる例である。稀なものとしては幻日・幻月といった別の太陽・別の月が現れたかのように見える現象もあり、歴史文献を紐解くと、様々な地域で人々の驚いた様子とともに記録が残されている。

黄砂と同様にこの時期に大気光学現象を起こすものに花粉がある。太陽や月のまわりにリング状に見える虹色の光は「花粉光環」などといわれている。

最近ではPM2.5も霞の原因となるが、ここまできると酷い時には太陽の光自体が弱められてしまう。この結果、決してやってはいけないが何かの偶然でサングラスもなしに太陽を直接みたときに、太陽表面の巨大黒点が肉眼で見えてしまうことがある。マスクが手放せない人も多いこの季節、幻想的な風景を作る担い手と思えば多少は我慢できる、というわけにはいかないか。

（玉澤春史・京都大学大学院文学研究科研究員／  
京都市立芸術大学美術学部客員研究員）

てーたいむ

## 今、ジャポニスムを 考える

高木陽子

(文化学園大学大学院生活環境学研究科教授)

村井則子

(上智大学国際教養学部准教授)

高馬京子

(明治大学情報コミュニケーション学部教授)

藤原貞朗

(茨城大学人文社会科学部教授)

ジャポニスム学会の編集としては二〇年ぶりとなる『ジャポニスムを考える』が刊行されます。編集委員の皆さんに、この二〇年間の研究動向の変化や、刊行にあたってのお考えをお聞きます。

——刊行のきっかけをおしえてください

高木…ジャポニスム学会は一九八〇年に、フランスの印象派を研究する近代絵画の研究者が中心となって発足させた学会で、二〇周年の機会に『ジャポニスム入門』(思文閣出版、二〇〇〇年)という概説書を刊行しました。この本では、パリだけではなくてロンドンやウィーンといった欧米の都市に広がった装飾美術や建築や音楽、写真やファッションなどのジャンルにまで広げて、ジャポニスムの要素をまとめました。これが、ジャポニスム研究の基本文

献となって今日に至るのですが、この度さらに二〇年が経って今の学会の状況を見ると、美術以外のさまざまな文化形態の研究が盛んになり、対象となる地域も欧米の大都市から周縁に至るまで広がっています。さらに、「ジャポニスム」という言葉を、当初の定義(一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての欧米における日本文化への関心や日本美術の影響)をこえて、今日の現象まで含めてジャポニスムという言葉で説明するような事態が発生しており、ここで立ち止まって「いったい私たちが探求しているのは何なのか」について考える必要が生じていました。そのような問題意識で、学会発足四〇周年を記念して二〇二一年の二月に「ジャポニスム研究の可能性——歴史と現在」というテーマの国際シンポジウムを開催しました。今回の論集は、そこでの発表や議論を、ジャポニ

スムに興味を持つ全ての人々に読んでもらえるような形にまとめたもので、二一世紀に入ってから的重要な論点ごとにまとめています。『ジャポニスム入門』の続編と位置付けることもできるかと思えます。

## ■二〇年間で大きく変わった学会

村井…編集委員及び執筆者の人選にあたっては、この二〇年ににおける学会の変化を強調することも狙って、『ジャポニスム入門』に執筆していない人を中心に選びました。

藤原…この二〇年の学会の変化といえば、かつては美術を専門とする研究者が中心だった。危険を恐れずにもつといえば、学会の核は「フランス美術専門の男性研究者」だった。ところが、昨今は「フランス美術」でもなければ「男性」でもない人が多数派になりましたね。この変化の背景にはなにがあるのでしょうか。

高木…まず入会してくる会員の出自・専門という観点から見ると、本場に様々な分野からの入会があり、もはや美術史の言葉だけでは



高木氏

ディスカッションできないような状況が二〇一〇年代には顕著にみられるようになってきました。もう一つは、同じく二〇一〇年代に海外会員の入会が相次いだことで会報などのバイリンガル化が進み、そこから大きく変わっていききました。

高馬…一昔前のジャポニスム学会は、(現代のフランスを研究対象とする私にとっては、入りにくい雰囲気がありました。でも、「ジャポニスム二〇一八」(後述)の開催もあり、「もうちょっと分野を広げて、現代の問題を本当に考えていかなければならない」という動きになり、私も入会させていただきました。マンガやファッションのような現代の問題をジャポニスム学会で語れる、こんな日がくるとは思いませんでした。

高木…変えていかなければいけないという状況もありました。かつてのジャポニスム研究の枠組みの中で研究が進んだ結果、若い人が入っていけるような余地が少なくなっていました。もう少し魅力的な学会にするためには、「違う見方もできるよ」ということ示していく必要があります。

## ■なぜ今、ジャポニスムを考えるのか

——書籍を読みますと、「今、ジャポニスムについて考えなければいけない」という執筆者の皆さんの強い危機感を感じました。

高木…日本政府がフランス政府に強く働きかけて実現した「ジャポニスム二〇一八」という文化イベントがパリを中心に行われまして。このイベントの中で、日本政府側がいう「ジャポニスム」という言葉が、元々の定義、つまり「一九世紀後半から末にかけて西洋の人々が発見した日本の美」というような定義から大きく外れて、現代の衣食住やポピュラーカルチャーといったことにも使われている。そして、もともとの定義ですと、ジャポニスムとは日本美術を受容した「欧米側の」現象だったはずですが、日本





藤原氏

側から発信するような文化の動きまでジャポニズムという言葉で説明されていきました。それが一般化しているような状況を目にして、ジャポニズム学会が使っている「ジャポニズム」と、現在一般的に人々が使っている言葉の意味が乖離していることを強く感じ、危機感を持ちました。

藤原…「ジャポニズム」とか「ジャパニズム」という言葉が、二〇〇〇年頃に中学や高校の教科書に出てからだと思うのですが、一般的にはジャポニズムと言えば「ニッポン万歳」型の現象を指すと思っている人が多くなった、という背景があります。私は、今年、大学でジャポニズムをテーマにじっくり講義をしましたが、大勢の学生が集まりました。美術史の講義を取らないような学生も、みんな最後まで脱落せず聴いてくれました。それだけジャポニズムという言葉が浸透したということだと思いますが、誤解されているところもあります。ジャポニズムの中にももちろん「ニッポン万歳」型もあっていいと思いますが、それを見つけないとだけじゃなく、そういった現象を通じて日本のことだけでなく外国のこととも考える契機になる、ということを伝えないといけないですね。その意味では重要な時期に刊行できたと思います。

村井…いつの時代にも日本文化というのは、ある程度、国策として売り出されてきたことはあったと思うんですけど、二一世紀に

入ってから、例えばクールジャパン戦略であったりソフトパワー外交であったり、それがすごく分かりやすい形になってきました。「世界における日本文化」ということに対しての注目が、「ニッポン万歳」型にせよ、やや批判的に見るにせよ、増してきたような気がしています。

高馬…同じことを逆側からいうことになりましたが、私はファッションを中心に、現代の日本のポピュラーカルチャーがいかに海外で広がっているのかということの研究をしています。海外における日本文化の受容をみていくと、たとえば「日本幻想型」というような、海外に住む人が独自に抱く日本のイメージ／表象を現実の日本として捉える状況がみられるなど、実態とのズレを感じます。現代のことだけを見るのではなくて、ジャポニズムの時代（九世紀後半）におきた現象から連続して見ていくことで、現代の文化の特徴がもつと見えてくるのではないかと思います。

村井…元々のジャポニズム研究のスタートは美術史であり、日本研究とは関係なく、フランスやアメリカなどで印象派を研究している人たちから始まったわけですが、同じ現象を見ている日本側から見るともつと多角的・異文化交流的に見えるところがあるのではないかと常に思っていたので、そういう意味では日本を拠点にする研究者がジャポニズムについてまとまって考えて、それを国内外に向けて発信するということは大きな意義があるのではないかと思います。

※編集部注…この後、同書の英語版の刊行を予定

——ロングセラーとなった『ジャポニズム入門』のように事典形

式にする選択肢もあったかと思っています。

村井…「ここにもあった！ ジャポニスム」というような感じで、新たにわかった情報を網羅して事典のようにすることも出来たと思いますが、その編み方ですと、読者は情報の集積として受け取れることはできても、話し合いには繋がりにくいかなと思いました。高木…いろいろな領域の方がジャポニスム研究に参入してきている状況にあつて、「私たちが問題としているのは何か」という議論をまずしないことには、まとまりがつかなかったと思います。

藤原…事典形式のものを作るには、ある程度、学問としてのジャポニスムの方法が定義づけられないといけないですね。二〇〇〇年に刊行した『ジャポニスム入門』は、美術に限つてですが、ある程度そういう方向性で定義づけを試みたのだと言えます。だけど、その後二〇一〇年代に入つて学会がより開かれたものになり、研究対象も多様な文化現象に広がった今のタイミングで事典形式にすれば、「こういうことをやらないといけない」というお題目が並んで、学会を閉塞させる方向へ向かわせてしまう可能性がある



村井氏

かもしれない。学問としてアカチュアルな議論を読者に提供するという意味で今回の形式（国内外の二名の執筆者による論集）は、良かったのでは、と思います。

■ただ一つの答えがあるわけではない

——編集段階の議論で苦労したことはありませんか？

村井…タイトルは結構迷いました。今回の本というのはジャポニスム自体を学べる内容、例えば「モネはどういう風に日本美術を見ていたのか」とか、そういう答えを探せる本ではないので。もともと学会内で考えていたテーマは「ジャポニスム研究の現在を、過去に戻つて考える」ということだったので、たとえば『ジャポニスムとは何か』というタイトルにしてしまうと、「これを読めば答えがある」ということになってしまいますから、ちょっと違いますよね。執筆者一二名がそれぞれの立場から、それぞれの問題提起をどんどん出していく内容なので。

藤原…編集の段階で一番驚いたのは、やっぱりみなさん凄く一所懸命で……。こんな編集委員会は初めてで、ちょっとしんどかったですけど楽しかった。執筆者もいろんな分野の人たちなので、考え方がかなり違うのは編集するうえでは難しいところでした。村井…附録のアンケート（「ジャポニスムとはなにか」という質問）に、それぞれの考えの違いが出ていましたね。

藤原…二〇二〇年代の証言として、貴重なものになっているのではないでしょうか（笑）。本来なら、アンケートの回答も（私以外の編集委員は）「編集してまとめるべき」っておっしゃっていたのですが、無理にまとめたら嘘になるし、偏向的になる。正反対のことを書いている人もいますし。ただ、正反対の意見が出たからといって、それは別に混乱しているわけでもないし、喧嘩しているわけでもない。多様な考え方が今の時点で出てきたということで



高馬氏

す。

**高木**…いろんな意見を編集せず  
に出版することで、開かれた学  
会だと示すことになりましたね。  
原稿が集まってきた段階で「こ  
んなに違うものが集まっちゃっ  
て、どうする？」という話し合  
いは、かなりしましたよね。

**村井**…そうですね。ジャポニスムを考えるにあたって難しかった  
ことについて、大きなものを二つ挙げると、一つは、ジャポニス  
ムというものを「ある場所と時間に限定された」現象として捉え  
て「そうじゃないものは、それ以降(対象外)」とカットするのか、  
それとも、「ジャポニスム的なものはずっと続いている」と考える  
のか。その問い自体にはたぶん結論も出ていないし、いろいろな  
意見がありますね。もう一つは、「ジャポニスムというのは、一  
体誰が主体の現象なのか」というのも、執筆者の中で意見は一つ  
ではないです。二〇二一年のシンポジウム終了後に、海外でジャ  
ポニスム研究している日本人ではない美術史家の方から「ジャポ  
ニスムは西洋から見た西洋人のものなのに、こんなに日本人が何  
か意見を言うのはおかしいんじゃないか」というようなリアクシ  
ョンをもらったこともあります。ただ今回は、タイトルからし  
て「日本文化表象をめぐる他者と自己」で、日本というものをテ  
ーマの中心に持ってきています。日本の立ち位置をどう考えるか。  
ここも一つの論点なのかなと思います。どうですかね。

**高木**…その部分に関しては、ある意味でこの本は、ジャポニスム  
の狭義の定義を変えたと言ってもいいんじゃないでしょうか。つ  
まり「日本側からの関与もこんなにあったんだ」ということを示  
したという意味は、大きいですよ。

**藤原**…本来ならそういったことがこの本の主張になるところです  
が、アンケートの回答には、ジャポニスムの定義を狭義に限定し  
ようという意見もあります。こういう意見も本に掲載されている  
のは悪いことではないと思います。「ジャポニスム学会編」という  
ことで出しますが、全員の考えが同じではありません。本書を読  
まれて、首をひねる会員の方もおられるかもしれません。

**村井**…だから「考える」と言うタイトルですよ。

——(全員が同じ考えではないとわかった上で) 敢えて「ジャポニスムつ  
て何ですか?」と聞かれたら、どう答えますか?

**村井**…文化というものを定義する時に、どこが境界なのかとか、文  
化が異なるものと出会った時にどういうことが起きるのかとか、異  
文化交渉あるいは交流の一例としてジャポニスムをアプローチす  
ることが出来ます。ただし、なぜ「日本」なのかということ、一  
九世紀末に西洋で起こったジャポニスムという特有の現象を近代  
社会において他の文化圏の異文化交渉の研究などに活用できるよ  
うな考え方やモデルがそこにあるのかということとは、これから問  
いかけなければならないと思います。

**藤原**…私は授業では分かりやすく、ジャポニスムの研究とは「世界  
の文化から日本の文化について考えること」、あるいは逆に「日本  
の文化から世界の文化について考えること」と学生に伝えていま



す。異文化交渉の研究とジャポニスム研究の違いは、そこにJAPANという固有名詞が入り込んでいることです。そして「国家ナイズム」という名称にもかかわらず、さして批判されることなく現在まで生き残っている。これがジャポニスムの特殊性で、異文化交渉の研究とはまた違う独自の視点を提示できる可能性もあるのではないかと思います。

※編集部注…この後、議論が白熱したため紙幅の都合でカットせざるをえませんでした。詳しくは本書をお読みください。

### ■誰もがジャポニスムの当事者である

——これからジャポニスムを学びたいという若い人たちへ、一言お願いします。

藤原…日本の文化から世界の文化について考える出発点として、ジャポニスムはとてつもない題材になると思います。だから、むしろ「ジャポニスムなんか学ばなくていい」と思っている人に、そうではないと伝えたい。日本美術や日本文学を勉強している人も「外国の人は日本の文化をどうみてきたか、どうみているか」を考えることは、今の時代には不可欠でしょうから。

高馬…今はコロナがあるので言えませんが、ぜひいつか海外に飛び出してほしいですね。自分が外国人として海外で暮らしてみること、「日本文化とは何か」「日本が海外の人からどうみられているか」ということを体感して海外の視点を自分の中に取り込むことで、初めて見えてくることがあるのではないかと思います。

村井…ジャポニスムを学ぶことは、日本について何かを考えると

きの、すごくいい契機になりますね。「日本文化とは何か」という定義があるとすれば、それは日本人が日本国内だけで生み出したものではなく、外部との交渉によって生まれてきたものだと思うので。

### ——どのような読者層を期待しますか？

藤原…この本に限って言えば、若い方だけでなく、広い世代の方に読んでもらいたいです。つい「ニッポン万歳」に向かってしまいうような世代の方にも、果たしてそれだけでいいのかと。

高馬…世の中の事を考えていくうえで、ジャポニスムという視点を取り入れてモノを考えていくことは有効だと思います。「日本の文化って何なんだろう」「日本って何なんだろう」と考えたことのあるたくさんの方に。いろいろな学問をしていくうえで、このジャポニスムと言うのは使えるかもしれません。

藤原…今ジャポニスム研究をやっている人には、もつと広く異文化研究を視野に入れて欲しいですし、逆に、異文化研究を中心にやっている人の頭の中にもつとジャポニスムという視点があつていいのではないのでしょうか。美術研究をやっている人だけでなく、異文化研究をやっている方、ジャポニスムとはあまり縁が無いと思われている方にも面白く読んでもらえる内容になっていると思います。

(二〇二三年三月七日 於明治大学、対面・オンライン併用)

ジャポニスム学会編

## 『ジャポニスムを考える』

日本文化表象をめぐる他者と自己

▼詳細は表紙裏面広告

## 護法善神

わが国の神々を分類するとすれば、まず思いつくのが天つ神・国つ神という分け方であるが、外来の神でありかつ仏法守護を使命にする護法善神は、どうもそういう分け方では対処できないようである。

天平神護元年（七六五）十一月、すでに出家していた称徳天皇が重祚の大嘗祭を行う際に発した勅に、「神等をば三宝より離れて触れぬ物そとなも人の念ひて在る。然れども経を見まつれば仏の御法を護りまつり尊びまつるは諸の神たちにいましけり」（『続日本紀』）とあり、三宝（仏法）と神祇は隔離すべきでなく、經典によれば神は仏法を護るものと主張する。「神等」はわが国古来の神々のことであるが、「経を見まつれば」とあるのだからヒンドゥー由来の梵天・帝釈天・四天王・金剛力士など天部諸尊をも考えている。両者を区別していないことになるのだが、ここに、仏法守護を使命にする護法善神がわが国において形づくられる基盤の胚胎していることが察せられる。

空海が高野山に伽藍を建立する際の啓白文に、「悪鬼神等」は伽藍結界の外に去り「善神鬼等」が伽藍に住し仏法を防護するよう

告げている（『性霊集』）のはその一例で、在地の矮小な神々に仏法守護を頼んでいる。

わが国で形づくられた護法善神がいくつか知られる。園城寺（三井寺）慶恩院志晃の著した『寺門伝記補録』は、その第四に「護法善神廟」の章を当てている。「護法善神廟」とは現在同寺金堂の南にある護法善神堂のことだが、かつては金堂のすぐ東側にあり、金堂本尊の弥勒菩薩を守護するという性格がよりはっきりする位置関係にあった。

その本尊護法善神像は、平安時代後期十一〜十二世紀のものとされる天部形である。天部形の髪型や服制をしていても、神なのだから尊格は簡単には決められない。しかし左手にもつザクロ果が古様に見られ、当初からこの持物だったのなら尊格比定はこれが決め手で、鬼子母神（訶梨帝母）というヒンドゥー教由来の神だと知られる。同神はもと幼児をとらえて喰う悪女鬼だったが、仏の教化により改心し幼児守護の善神になったとされる。本像は天部形に仏像の持物（ザクロ果）をもたせる護法善神（鬼子母神）なのである。

伊東史朗

園城寺では新羅明神もまた護法善神である。『寺門伝記補録』の第一「新羅祠記」は同明神に関する記事を集めており、それによれば、智証大師円珍が唐から帰国する際に現れ、教法の守護を約した護法善神である。貞観二年（八六〇）、円珍はヤナギで新羅明神像をつくり、寺域北方に神祠を建ててまつた。十一世紀のものとされる現存像は、老年相で、冠を被り袍を着して坐すという伝統的な男神像と変わらないながら、両手は拱手や把笏でなく、失われた持物は左手に錫杖、右手に経巻だったと記される。俗形男神像が錫杖と経巻という仏教的な持物をもち、仏法守護の神であることを示している。

護法善神をまつる寺院はほかにもある。そのひとつが明恵上人の開創になる高山寺で、嘉祿元年（一二三五）に供養された鎮守社では、外来の神である白光神と善妙神がまつられ、いずれもその形姿は明恵の創意になる護法善神である。

明恵の高弟高信の撰になる『高山寺縁起』によると、インドのヒマラヤの神である白光神はサンスクリット語で「鬱多羅伽神」といい、同神を勧請した理由を「禪法擁護の誓」あるゆえとしている。形状を見ると、天部形で、左手掌を腹前で仰ぎ、右手は胸前で掌を前に向け、持物を亡失する。この両手の構えは、中国宋代にその信仰が高まりわが国鎌倉時代に受け入れられた五台山文殊菩薩の手勢に一致し、したがって持物も五台山文殊と同じ如意であった。本像は、天部形に特定の仏像（五台山文殊）の手勢と持物を加えたものといえ、その使命は「禪法擁護」である。

『華嚴縁起』絵巻は、新羅からの入唐留学僧義湘に恋慕した善

妙が大願を発して龍に化し、帰国する義湘の船を守った話を載せる。善妙神像はその善妙を神格化したものである。『高山寺縁起』に、善妙神を勧請した理由を「華嚴擁護の誓」あるゆえとしたのは絵巻の語るところによっている。そこに描かれた善妙のさまざまな姿態に比べ、高山寺像は端然とした立ち姿であるが、装束が同じなので、絵巻をもとにしていることが分かる。

絵巻では義湘の修行道具類を納めた篋がくり返し出てき、いっぽう高山寺像ではその篋を両手で捧げているのは、これが善妙の標幟とされたからである。よって本像は唐装の俗人女性形にこの仏教道具をもたせて神像としたもので、右の諸例とは異なる過程を経て成立した形姿だが、「華嚴擁護」を使命とする護法善神なのである。

わが国で形づくられた護法善神は、以上のように、天部形、俗形あるいは一般的な神像の姿に仏教尊像のしぐさや持物を複合させて成りたっている。そのような成立の仕方は奈良・平安時代前期に形づくられた神像に前例があった。たとえば東寺の八幡三神像（平安前期）は、主神の八幡神は僧形の男神像で、念珠と錫杖をもち、両配神は天部形の女神像で、仏像の印相のような手つきだが持物があつたのかも知れない（現在もっている宝樹は後補）。僧形や天部形に異種の仏教尊像の手つき・持物などを複合させることで神仏習合の様相を表現している。

神像の確立期、複数の仏教尊像などを複合させることで神を暗示する神仏習合像がこのように行われたのだが、護法善神の形姿はそのような動向を受けている。

（和歌山県立博物館長）

## 『1873年ウィーン万国博覧会』

宮田奈奈みやた なな

## ——日頃からみた明治日本の姿』刊行に寄せて

ウィーン中心部に位置するオペラ座のファサードには、金色で「Kaiser Franz Joseph I 1868」の文字が掲げられている。現在のウィーンの旧市街は、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の治世下で形作られた。彼はいまま残る国会議事堂、市庁舎、現在のブルク劇場、オペラ座を建築、美術史美術館、自然史博物館を設立し、さらにウィーン万国博覧会で国際都市としてのウィーン市を示すために城壁を取り壊して、リング通りを敷設した。妻と一人息子、さらには後継者を不幸な死で失い、第一次世界大戦中に生涯を閉じるという、晩年の悲劇の印象が強いフランツ・ヨーゼフ一世であるが、彼のこの時代がオーストリア＝ハンガリー帝国が栄華を極めた時代であったことは確かである。

その時代の片鱗は、上記のような巨大建築物だけでなく、現在も営業を続けるオーストリア＝ハンガリー帝国時代創業のカフェや帝室御用達だった専門店の数々からも窺える。二度の大戦を経ているにもかかわらず、ウィーンでは歴史が今ここに連綿と息づいている。あらゆる変化を内包する玉虫色の包容力を有していることが、ウィーンという街の特徴と言える。

このたび刊行される『1873年ウィーン万国博覧会』は、そのウィーンで皇帝フランツ・ヨーゼフ一世治世下の一八七三年に開かれた万国博覧会を主題にした論集である。一八六九年に外交関係を樹立したばかりの日本とオーストリアの関係において、このウィーン万博はお互いを大いに発見し、その後のそれぞれの文化に多大な影響を与え合う重要な機会となった。

拙稿では、ウィーンでジャポニスムが円熟するまでの過程において、どのようにその素地が社会に形成されたのかという観点で、ウィーン万博後の日本の流行までの軌跡を描いた。日本の展示がウィーンの人々を魅了した理由は多岐にわたるが、そもそも、日本庭園や神社を再現するために日本から石や木材を輸送し、予定されていた展示スペースには収まりきらないほどの展示品を用意し、さらにはトリエステからウィーンに向かうまでの汽車での移動には不都合なほどに巨大な仏像（紙製。一部は燃えてしまい、最終的には頭部だけになってしまった）を運ぶなど、日本の万博への熱意は、あらゆる人々に強烈に伝わっていたのだろうと推察される。当時の新聞記者の文体は、学術論文のようなものから、ドラマチックな

小説仕立てのもので様々であるが、日本という国や人々についての分析や表現を試みた文章に目を通すと、その強烈な熱意が謎の吸引力となって、人々を引き付けていたことがわかる。新聞記者の中には、展示の報道では飽き足らず、新たに設置された日本公使館に突撃取材に出かけたり、日本の博覧会委員らの万博後の動向を報道したりした者もいた。

もちろん、日本の美術工芸品を中心とした展示品も人々を魅了していた。筆者はこれまで様々な立場の人物の記録に目を通してきたが、とりわけ印象に残った表現がある。「この指先の器用な人々の作り出したものを見ると、どこで産業が終わり、どこから芸術が始まるのか、わからない」という一文である。この感想からは、日用品にも見られるような完成された美しさとそれを可能にした高度な技術力が率直に評価されていたことが窺える。

また、日本は、新聞記者や美術館の関係者だけでなく、芸術家や音楽家の重要なパトロンであったパウリーネ・フォン・メッテルニヒ侯爵夫人のような人物をも魅了した。彼女は、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトをウィーンの社交界や王宮に紹介した、かの有名な宰相メッテルニヒ侯爵の孫娘にあたる人物である。彼女は、一九〇一年五月に三日間にわたり「日本の桜祭り」と称する大規模な慈善事業を、「日本風に」着飾った女性四〇〇人を実行委員として行った。ウィーン万博の会場として建てられたロトゥンデで開催されたこの催しには、駐オーストリア日本公使牧野伸顕の妻も動員されたという。

ロトゥンデは、一九三七年に焼失してしまったが、ウィーン万博

の会場が設営されたプラターは現在も市民の憩いの場として週末には多くの人々が集う。その一角のベンチに座りながら、ウィーン万国博覧会の会場の地図や新聞記事の挿絵などを眺めていると、万博の様子を鮮やかに思い描くことができる。この時の私のお気に入りの想像の一つが「日本庭園にいたら、すぐそばで行われていた野外演奏会で演奏されていたヨハン・シュトラウスの音楽が聴こえていただろう」というもののだが、ウィーン万博と音楽の関係について詳しく書かれた論文がみあたらない。そこで音楽史の生き字引である前楽友協会資料室室長のオットー・ビーバ氏に尋ねたことがある。すると、さらに想像がたくましくなる情報がずらりと寄せられた。その一つが「ウィーン万博では、ヨハン・シュトラウス二世がロトゥンデ・カドリーユを、エドゥアルト・シュトラウスとフィリップ・ファールバッハ二世がウィーン万博を主題にしたマーチを、カール・ミヒャエル・ツィーラーが同じくウィーン万博を主題にしたワルツを作曲した」というものである。今日、ニューイヤークンサートや舞踏会で必ずと言って良いほど演奏される楽曲を生み出した作曲家にもウィーン万博との接点があったこと、もしかしたら、彼らも日本庭園を訪れていたかもしれないことなどを想像すると、ウィーン万博という出来事の大きさ、豊かさに対する感慨は深まるばかりである。

来年二〇二三年には、ウィーン万博一五〇周年を迎える。この節目の年を前に、本書が、当時の日本がウィーンで世界に示した矜持や最初期の日墺関係を再考察するための一つの機会となれば、望外の喜びである。

(ウィーン大学神学部宗教学科研究員)



# 書をめぐるカンバセーション

『現代美術史における前衛書のリポジショニング』刊行

宮津大輔みやづ だいすけ

に寄せて――

「現代美術」の定義は時代や環境によっても様々であり、同時代の美術表現という視座から「書」を定義し直すという、あたかも風車に立ち向かうドン・キホーテの如く些か無謀な試みを、一冊にまとめたものが拙著『現代美術史における前衛書のリポジショニング』である。同書では墨人会の活動に焦点を当てつつも、亀甲文字からチームラボ、果ては慶應義塾大学・桂誠一郎研究室が開発した書道ロボットまでを網羅している。

リサーチを通じて書の何たるかを研究する中で、実際に書家あるいは（現代美術の）アーティスト、ギャラリストなどへのインタビューを行い、彼らの生の声を反映した。記録した内容自体はどれも非常に興味深いものの、残念ながら拙著に取り上げることが叶わなかったものも少なくない。折角いただいた機会に、それらをご紹介しておきたい。

二〇一九年十一月、宋涛と季魏煜によるアーティスト・デュオ鳥頭バードヘッドのスタジオを上海郊外へと訪ねた時に、我々はチャールズ・サンダース・パースの記号学を援用した、ロザリンド・クラウスによる写真論について活発な議論を戦わせた。彼らの新作が、そ

れまでのストレート・フォトとは異なり、コラージュや写真の上に揮毫したものであったこともその一因である。裸婦を撮影したモノクロ写真の上に、墨で「女」とも「也」とも読める一字を書いた《2019-SS-170-F005》（二〇一九年）は中々に味わい深かった。也（中国語の発音：yě）は、中国語で「〜である」や「〜も」といった意味を有しながらも文法上は強調機能のみで、単独では文成分にはなり得ない虚詞である。また、その古語には女性の秘部という意味が含まれている。也を多用する欧陽修の「醉翁亭記」は自然の中に身を置く喜びを謳う飲酒詩であり、鳥頭自身が同字を敢えて「yě」と解釈するのも、自国古典文学への豊饒な知識と愛情ゆえであろう。このような作品がインデックスなのか、はたまたシンボルかといった論争は、ウイスキーの酔いも手伝ってか夜遅くまで尽きることがなかった。

取材を重ねていくうちに、書における泰斗の聲に接する幸運にも恵まれた。二〇一八年五月、銀座の喫茶店で取材した現役最古参の書家・表立雲は、鷹のように鋭い眼光で一瞥した後、自らの創作活動を「本籍は漢字であり、現住所は前衛」と強く言い放つ

た。さらには、徹底した臨摹の過程において自ら編み出した「碑帖透映鑑別」法（年代別に拓本を重ね、摩耗を識別する方法）について説くと共に、「あんな擦り減った（碑の）拓本をありがたがっているのはダメだ」と舌鋒鋭く批判していた。

そこから遡ること一〇日前、移転前のウナックトウキョウで画廊オーナーにして評論家でもあった海上雅臣から、井上有一に關する様々なエピソードを聴取した（同年五月）。なかでも「惚れて（自ら作品を）買ってからでない」と扱わないし、批評もしないの一言には、コレクターとして強い共感を覚えた。そして、「これが、僕のスタンダードだよ」と指さした先には、執務室の壁に掛けられていた浅井忠の静物（一九〇三年）と萬鉄五郎による海辺の風景（一九一三年）を描いた油彩画、高山辰雄の富士山（制作年不明）、そして「井上有一展 Write and Live YU-ICHI」（二〇一七年・南京芸術学院美術館）のポスター『貧』と『麻』二種があった。

お二人の存命中に、拙著をお届けできなかったことが心残りである。衷心よりお悔みを申し上げたい。

さて、有一は野草を束ねた自家製の筆である通称『箒』を手に、エナメルでケント紙に書いた非文字書を「散乱ノ極取拾ナシ、ジャズノ金属的音ナリ、ダイナミズムナリ」と一九九五年六月八日の日記に記している。その激しさは自作の「ぐわあーっとブツタギッテヤル。書もへったくれもあるものか。一切の断絶だ。創造という意識も絶する。メチャクチャデタラメにやつつけろ」という詩の一節にも表れている。勁烈な筆勢から、フリー・ジャズの演奏を想起したのであらう。

日本通で知られるアーティストのケリス・ウイン・エヴァンスは、「俳句はミニマルだけど非常に豊かだ。書にも同様の類似性を感じる。先日、子供用の漢字ドリルを試してみたが、書き順はとも理に適ったものだった。また、書きぶりというか運筆は、フリー・ジャズのグループと似ている」と書の印象について答えている（二〇一八年五月のインタビュー）。草月会館のイサム・ノグチによる石庭『天国』と自らのインスタレーションである光柱を舞台に、勅使河原蒼鳳筆『雪月花』屏風を揚幕に見立て、そこで演じられる能「井筒」を作品とする彼の一言には、単なる思い付きとして片付けられない含蓄を感じる。

他方、ポータブル・エキシビションと銘打たれた作品図版、小説、レコードで構成された作品集『鷹』（一九八二年）で共演した作曲家の一柳慧は、「有（の）書は」文字の持つ意味を造形性が凌駕しているため、（いわゆる従来）の書とは異なる」視覚芸術だと思っています。また、空間芸術であるにも関わらず、どこか時間的な要素を感じさせます」（括弧内は、筆者補足）と述べている（二〇一八年六月）。この一言は有一が示す「場」と、抽象表現主義における「field」、そしてアクション・ペインティングの「arena」といった空間の比較・異同について考察する際に大変示唆的であった。

久し振りに、鳥頭からのメッセージが届いた。そこには、「今度の新作テーマは、デコードだ」と書かれてあった。新型コロナ収束後の、スタジオ再訪が楽しみである。

（横浜美術大学教授）

## 消えゆくメキシコ漫画の歴史と

## 資料保護

——メキシコのイストリエタ博物館——

アルバロ・  
エルナンデス

漫画はスペイン語でイストリエタと言う。メキシコに限らずペイン語圏の国々では一般的に使われている言葉である。ここでは、このイストリエタの研究と資料の発掘・保護の意義について少し書きたい。

メキシコのイストリエタは、二〇世紀初頭のメキシコ革命を出发点に、米国のコミックスからの刺激を受けながら、メキシコの二〇世紀の社会とともに形成された、とても根強く豊かな文化だった。イストリエタは、メキシコ社会の理解、特にメキシコにおける「大衆」と言うものの形成や性質を知るために欠かせない重要な資料である。しかし、現代のメキシコでは、このイストリエタ文化があったことが、徐々に忘れられている。

よく知られている通り、特に漫画文化の場合、漫画雑誌などには資料の価値が認められないことが多く、雑誌などが消えてしまうことは珍しくない。そのような中、米国、フランスや日本においては、漫画・コミックス文化が再評価されて、少しずつその研究が芽生えてきたが、メキシコのイストリエタの置かれた状況はそれらと比べればほど遠い。

もちろん、メキシコではイストリエタ文化は完全に忘れ去られ

ているわけではなく、いくつかの展示が開催され、図録も発行され、メキシコ政府の支援を受けて開催されるイストリエタの展示なども、時々見られる。また、メキシコの唯一のイストリエタ博物館の設立者で、館長でもあるルベン・エドゥアルド・ソト・ディアスの活動、そして独立研究家であり、メキシコの国立新聞雑誌資料館にあるイストリエタを整理して、カタログ化するプロジェクトをリードしたファン・マヌエル・アウレコエチエアの活動などが、特に評価されるべきである。

しかし、アウレコエチエア自身が指摘するように、結局のところ、メキシコで注目されているイストリエタは全体のほんの一部で、非常に限られており、メキシコの大衆イストリエタの本格的な再評価には繋がらないというのが現状である。

注目される数少ない作者には、エドゥアルド・デル・リオ、通称リウスとガブリエル・バルガス等が挙げられる。リウスは、イストリエタの形式を展開させ、政治的な批評やエッセイを数多く手がけ、またメキシコ社会を鋭く風刺したキャラクターを生み出した。

一方、ガブリエル・バルガスの人気作品「ラ・ファミリア・ブ

ロン」は、有名な批評家カルロス・モンシバイスによって、メキシコの「ピカレスクの頂点」と評価されたこともある。

ところが、このようないくつかの例外を除けば、大衆的であった多くのイストリエタ雑誌は再版されず、ゴミ箱いきという運命を逃れられない。

そこで、上述したルベン・ソトの活動の重要性についてここで特に強調したい。ルベン・ソトは二〇〇一年一二月にさまざまなイストリエタ画家の協力を得て、メキシコで唯一の漫画専門博物館であるメキシコ・イストリエタ博物館「ホアキン・セルバンテス・バソコ」(Joquin Cervantes Bassoco)を設立した。

この博物館が誕生した背景には、作家やその遺族が持っている原画や雑誌を保管する場所が彼らの住宅にはなく、それがゴミとして始末される場合が多く、また高齢に差しかかった作家たちの収入源はないに等しく、彼らは個人コレクターなどに自分たちの手掛けた原画や個人の資料、雑誌を売ったりし、それを運良く買い取ってもらえれば、その収入で生計を立てられるという悲惨な現状がある。そのため、貴重な資料が散逸することは珍しくなく、閲覧しにくくなっているとソトは述べている。

そんな片隅に追いやられた作家たちに敬意を払い、大切な資料を保護し一般に公開することは、重要であるにも関わらず、今まで誰も行動を起こしていないことに気付いた彼は、こういった活動に専念するイストリエタ博物館を、一般市民の協力を得て立ち上げた。

メキシコ・イストリエタ博物館はメキシコのモレロス州アヤラ

区アネネクイルコ市にある非営利機関であり、現在、所蔵している資料は、一九三三年以降に出版された約六〇〇〇冊のイストリエタ雑誌、漫画のページや表紙を含めた約一万五〇〇〇点の原画、一〇〇〇点以上の写真で構成されており、作者から寄贈された写真資料や三〇〇点程度のイストリエタやコミックの研究関連資料のほか希少価値の高い書籍も保有している。

所蔵品には、作者やその遺族から寄贈されている個人資料が多く、作者や編集者が製本してまとめたイストリエタ連載の完全コレクション、作者が参考にしていた資料、作品制作のためのメモドラフト、印刷所への指示、原稿の修正、落書きなど、まだ書かれていないイストリエタの表現史にとって、貴重な資料が数多く集められているのがこの博物館の特徴である。

イストリエタ博物館は一般市民に支えられているため、適当な施設を見つけるのは非常に困難で、この博物館の約二〇年間の歴史において、湿度の管理、洪水、またネズミ、白蟻や虫による被害、場合によって盗難といった問題に遭ったことも一度や二度ではなかった。

そうした中で、資料の整理、アーカイブ化、またその情報の公開はソト館長がほぼ自力で行っており、これまでに主として博物館の資料を用いて、三〇点以上の研究書を公開してきた。

消えていく資料の価値を評価、研究し、公開していくというのは簡単ではない。しかし、こうした作業を行わない限り、「大衆」の姿を正確に捉えることは叶わないのである。

# 「永遠の都」から「日本皇帝の城下」へ あるポルトガル人司祭の旅路を追って

阿久根晋

二〇二〇年二月、リスボンからバスに揺られること四時間半、私はポルトガル内陸部のカストロ・ダイレに向かっていた。この地は、私がこの二年あまり追いかけてきたイエズス会士の一人、セバステイアン・ヴィエイラ (Sebastião Vieira) の故郷である。

今から四五〇年前、一五七二年一月二〇日に誕生したヴィエイラは、「キリシタン世紀」の末期、日本人信徒とローマ教皇の精神的交流に寄与したことで知られている。「セバステイアン」の名はディオクレティアヌス帝時代の殉教者、聖セバステイアヌス (カトリックの記念日は一月二〇日) にちなむという。そしてヴィエイラも「日本皇帝 (Emperador de Japão)」の宗教政策のもと、江戸城下で信仰に命を捧げた。一六三四年六月六日のことである。

現在、カストロ・ダイレにはヴィエイラのプロンズ像が建ち、彼の名を冠した小路も存在する。海外史料調査のとともに、研究対象に縁のある土地の踏査を重視する私は、ヴィエイラの郷里を訪ね、そこでの記念顕彰の証を確かめておきたかったのである。

イエズス会布教史を専攻する私がこの人物に注目するようになったのは、キリシタン史の図録制作とバチカン日本交流史のプロ

ジェクトに加わるなかで、計四回の来日と日欧間の往復という稀有な実績を知り、その越境的足跡に興味を惹かれたからだ。

明治後期に村上直次郎が発見し、「金銀泥や箔を散し、日本文にラテン訳文を添へた立派なもの」と讃えた日本信徒代表者の教皇パウルス五世宛て奉答書は、ヴィエイラの手を経てバチカンに届けられたとされる。ウルバヌス八世がキリシタンに宛てた返書の伝達も、ヴィエイラ自らが担った。教皇からの使命を果たす途上、「ローマ帰りの伴天連」ヴィエイラは、大坂の海で追及者に捕らわれる。まず長崎と大村へ、ついには江戸送りとされて詮議を受け、殉教を遂げる数ヶ月前には、牢舎から三通の書簡を発した。かようなドラマティックな生涯への感慨もまた、私をカストロ・ダイレに導くきっかけとなった。

ヴィエイラの殉教から半年後の一六三四年二月、その確報がマカオに入ると、街はルミナリア (イルミネーション) や馬術競技など、さまざまなフェスタで沸き立つ。連日の「熱狂」は徳川政権にも伝えられたが、これはオランダ東インド会社の海勢力と情報収集の結果であった。



やがて一六三七年、マカオのイエズス会日本管区本部の主導により、聖人に次ぐ「福者」の位にヴィエイラを昇らせんとする運動が進められていく。バチカン文書館に遺るこの列福調査記録（ポルトガル語史料は、調査に関わった人々の証言が書き留められており、彼らとヴィエイラとの接点や、ヴィエイラの旅の終着点に迫るうえで役立つ）。

列福調査とは別の角度から眺めてみても、この文書は興味深い。というのは、アジアの海を舞台に活躍した人々や、マカオ社会の「多様性」が垣間見られるからだ。第二次調査の記録には、ロポ・サルメント・デ・カルヴァーリヨ、ドウアルテ・コレア、ドン・ゴンサロ・ダ・シルヴェイラなど、計一六人の名が確認される。筆頭のカルヴァーリヨは、長崎貿易とマニラ貿易で影響力を奮った大立者であった。コレアも両貿易に携わり、後の一六三八年に大村牢で島原天草一揆の記録を執筆したことも知られる。そして証言者一六番目のシルヴェイラは、一六三四年の江戸参府で徳川家光に謁見したマカオの使節であった。この使節に宛てたヴィエイラの獄中書簡は、列福調査の重要参考資料とされた。

ヴィエイラの殉教について「声」を残したのは、ポルトガル人の有力者だけではない。たとえばアントニオ・ネレッティは自らを朝鮮の生まれと述べ、長崎奉行所の南蛮通詞を務めていたという。またドン・パウロ・オギ (Ogi) なる日本人の出自情報には、“Caza del Rey Dom Francisco de Bungo” すなわち「豊後王ドン・フランシスコ（『大友宗麟』の一族）」と書かれている。証人一六名のうち唯一の女性であるドナ・レジーナ・ペレイラも、パウロ

と同じく豊後大友家の流れを汲むクリシタンであった。以上の三名は日本を逐われた末に、マカオの住民となった。

調査手続きの記録という性格上、この文書は定型表現の繰返しがあるなど、一見すると「取り扱い」が難しい印象を受ける。とはいえ、光の当て方しだいでは、調査対象とされた司祭の軌跡のみならず、調査に関与した個々人の背景、営み、彼らの置かれた境遇の断片が浮かび上がってくる。それらを掘い集めれば、他史料との連関も見え、新たなキリスト教交流史を編む糸口が開けるものと期待したい。

さて、日本から遙か遠く離れた地のヴィエイラの「痕跡」に触れてきたが、彼の旅を巡る材料は、実は国内にも見つかる。それは、長崎市西坂町の二十六聖人記念館に飾られたヴィエイラの殉教図である。炎のなかで天を仰ぐ姿を描いたこの油彩画は、一七世紀のセビリア製というが、成立事情の仔細は明らかでない。ヴィエイラが火焙りの前に受けた「穴吊り」の刑は反映されておらず、聖セバステアヌスの描写に似せているわけでもない。セビリアの画室から長崎の記念館に至る作品の来歴を辿ることも、取り組みがいのある課題となろう。

研究テーマにまつわる言語・地域・時代の広がり、多彩なアプローチ——これを活かした探求の試みこそ、かつて村上直次郎らが切り拓いた日欧交流史の「旅」を愉しむ秘訣であると思う。

（日本学術振興会特別研究員PD）

## 二河白道図

郷司泰仁ごうし やす ひで

(公益財団法人香雪美術館学芸員)

阪急御影駅<sup>みかげ</sup>を降り、東南に五分ほど足を進めると、御影石の塀に囲まれた林がある。ここは、朝日新聞を創刊した村山龍平<sup>りゅうへい</sup>(一八五〇～一九三三)が、明治三十三年(一九〇〇)頃に数千坪という土地を購入し、明治から大正時代にかけて、洋館、茶室、書院などを建てた場所である。この建物群は「旧村山家住宅」として、平成二十三年(二〇一一)に国指定重要文化財となっている。

香雪美術館はこの敷地内に、昭和四十八年(一九七三)に開館し、平成二十二年(二〇一〇)に公益財団法人となった。村山龍平が収集した日本、東洋の古美術コレクションを収蔵し、所蔵品は重要文化財十九点、重要美術品三十三点を含み、仏教美術、書跡、近世絵画、茶道具、武具など、各ジャンルを網羅している。平成三十年(二〇一八)に大阪市北区の中之島に、二館目の美術館である中之島香雪美術館を開館し、神戸御影の香雪美術館とともに、村山龍平のコレクションへの理解を深めていただく機会を設けてきた。御影の香雪美術館は令和三年(二〇二一)十二月の展覧会を最

後に、施設設備改修工事のために長期休館へと入った。現在、展覧会事業は中之島香雪美術館でのみ行っている。

中之島香雪美術館では、四月九日から五月二十二日まで、企画展「来迎——たいせつな人との別れのために——」を開催している。死後、阿弥陀如来<sup>あみだ</sup>が聖衆<sup>しょうじゅう</sup>をひきいてお迎えに来る様を描いた「来迎図」や、死後に向かう遥か西方の極楽浄土を描く「浄土図」を紹介している。本稿で紹介するのはその展示品の一つ、重要文化財《二河白道図<sup>にがびやくどうず</sup>》である。

仏教では、功德を積んで亡くなった人は、阿弥陀如来に導かれ、その支配する浄土である極楽に往生すると考えられている。阿弥陀の来迎や往生するための方法を具体的に述べる経典『観無量寿経』では、往生するには、阿弥陀を一途に信じて、来世への往生を願う心が必要だと説かれる。そこで、人々は極楽に生まれかわる様子を、想い浮かべようとした。これを「観想念仏」といい、阿弥陀の称号である名号「南無阿弥陀仏」を一心に称える「称名念

仏」とともに、往生する修行法として重要視された。

しかし、この浄土を想い浮かべることは容易なことではない。中国で浄土信仰を確立した僧・善導（六一六～六八二）は、『観無量寿経』の注釈書『観無量寿経疏』で、「二河譬」と称される譬え話をもって極楽へ行く行程を説明した。様々な障害を乗り越え、火河と水河（二河）の真ん中にある白道を進み、極楽に往生するという話である。これを視覚化した作品が二河白道図である。

当館が所蔵する《二河白道図》は、諸本の中でも有名な作品の



《二河白道図》（香雪美術館蔵）

ひとつである。画面上部に極楽、下部に現世を配する。極楽は楼閣を大きく表し、ここの主・阿弥陀如来は、観音菩薩、勢至菩薩とともに、楼閣内に鎮坐している。阿弥陀の前には蓮池が広がり、菩薩衆が集う舞台が設けられる。上空には天人や楽器が舞い、煌びやかな極楽の情景を詳細に表す。現世では、向かって右下、屋形の中に出産場面を配し、屋形の外側に老人、病人とともに、墓場で腐乱した死体を描く。現世の大部分を四苦（生・老・病・死）に当て、穢れたこの世を表現している。四苦の上方には、賊徒と悪獸

がいる。この賊徒と悪獸は間違った考え方を象徴的に表している。細くて長い白道に、人物五人が歩を進める。白道の左右には、怒りや憎しみを表した火河、貪欲や執着を表した水河がある。二河の中には、弓で人を射る男性らと、財宝に囲まれた人物が配される。これらは、人々の煩惱を表す。現世側には、白道を渡る人に行くことを勧める釈迦如来、来世側には、極楽へと招き呼ぶ阿弥陀

如来が描かれる。釈迦の左右に、弟子の目連・阿難とみられる人物、阿弥陀は脇侍の観音菩薩、勢至菩薩を従えて、対になるように構成している。阿弥陀三尊は、尾を後方にたなびかせた白雲に乗っており、来迎する状況を示す。さらに、釈迦の後ろに貴婦人とその従者が描かれる。この貴婦人は『観無量寿経』の中で、釈迦に極楽往生の方法を質問した韋提希夫人とみられる。

これらのモチーフの中で、詳しく描き込まれた極楽の風景や、釈迦に従う目連と阿難、韋提希夫人、現世に配される四苦の表現は、二河白道図諸本でほとんど表現されない本作の特徴的な部分である。このように、本作には描かれるモチーフの数が多く、諸本の中でも、物語の要素を数多く盛り込んだ作品となっている。

四苦の表現は、滋賀・聖衆来迎寺「六道絵」（鎌倉時代、十三世紀）に近似した表現が見られる。また、浄土図をベースとした極楽の描写や、釈迦と韋提希夫人を同時に描いていることを鑑みると、浄土宗西山派の祖である証空（一一七〇～一二四七）の存在が注目される。証空は、当麻曼茶羅を重要視し、その転写本を多数制作して、布教に活用した。また、その著書『観経散善要義 釈観門義鈔』の中では、釈迦と韋提希、二河白道が扱われている。そのため、本作の制作には、証空の思想を基とした西山派の関与が想定されている。

火河の揺らめく炎や水河の荒れ狂う波は的確に表現される。釈迦や阿弥陀、浄土には金泥や截金を用い、荘厳性を高めている。出座場面にみられる、扉や室内の間仕切りには、それぞれ水墨による山水画が描かれている。このように、細部を見ても、絵師の力

量の高さが推測される。鎌倉時代、十三世紀に遡る作例とみられる。

村山龍平は、収集した仏教美術の名品を大型図録『玄庵鑑賞』（二巻、國華社）として大正三年（一九一四）に刊行し、本作も掲載されている。さらに、それを遡る、明治四十四年（一九二一）の凡例を持つ、村山の収集した絵画・書跡の目録『古書画仮目録』にも、仏画の項の二番目に本作が記されている。村山コレクションを代表する作品のひとつである。

## 香雪美術館（長期休館中）

### 【所在地】

〒658-0048  
神戸市東灘区御影郡家2丁目12-1  
TEL:078-841-0652  
ホームページ <https://www.kosetsu-museum.or.jp/mikage/>

## 中之島香雪美術館

### 【所在地】

〒530-0005  
大阪市北区中之島3丁目2-4 フェスティバルタワー・ウエスト 4階  
TEL:06-6210-3766  
ホームページ <https://www.kosetsu-museum.or.jp/nakanoshima/>

### 【開館時間】

10:00～17:00（入館は16:30まで）

### 【休館日】

月曜日（祝日の場合は翌火曜日）

### 【展覧会】

企画展「来迎——たいせつな人との別れのために——」  
会期：2022年4月9日（土）～2022年5月22日（日）  
前期：4月9日（土）～5月1日（日）  
後期：5月3日（火）～5月22日（日）

### 【入館料】

一般／1,000円 高大生／600円 小中生／300円

▼このたび、学術書の企画を公募することになりました。弊社では、高い学術的価値と後世に残すべき文化的価値を有する書籍の出版を理念として掲げ、より普遍的で、末永く基本図書となる企画の発掘に力を入れております。しかしコロナ禍がわたしたちの生活様式や常識を大きく変え、学

界の環境も変化している今、これまでとは違う企画の発掘方法も必要なのではないかと考えました。とりわけ既存の学問の枠組みに収まらない研究は、発表の機会に恵まれないことも多いことと存じます。ユニークな研究成果との出会いを期待しつつ、ご応募をお待ちしております。(36頁参照)

▼新コーナー「ミレニアル世代の研究レシビ」が始まります。毎回、新進気鋭の若手研究者に、研究成果の一端をご紹介いただきます。若い世代が生み出す新たな研究潮流を世の中にお届けするお手伝いができれば幸いです。

▼春の学会シーズンが近づいてまいりました。ウイズ・コロナの生活も三年目に突入しましたが、会場での対面販売を実施する学会は、まだ少数にとどまるようです。皆様に直接書籍をご紹介する機会の復活を祈りつつ、今年もオンラインでの書籍紹介などに参加させていただく予定です。

▼本誌創刊以来、唯一変わらず続いているコーナー「てぃーたいむ」。ジャポニスム学会の先生方にご登場いただいたのは39号(平成12年)以来2度目です。また二〇年後もお待ちしております。

▼「校訂 原本 古画備考」刊行。音楽や映画のように、史料においても、オリジナルの価値は不滅です。ほぼ無修正ノーマット版の世界を、図書館などでご堪能ください。(大)

▼物件情報を見ていると時間を忘れてしまいます。屋上に建つ「山岡さん物件」や、丸い形の部屋など、不便そうではありますが、それでも一度住んでみたいものです。(m)  
▼以前から飼っている3匹のイモリに加えて、半年程前にベタを迎えました。そして淡水フグの愛らしさも気になる今日この頃。ワンルームの我が家が水族館と化す日も遠くない、かも。(n)

▼表紙図版・・「万国博覧会への東方からの来客」風刺新聞 *Der Floh*, Wien, 13. April 1873 (部分、ペーター・パンツァー氏蔵) / 「1873年ウィーン万国博覧会」より

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

## 鴨東通信 No.114

2022 (令和4) 年4月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail [pub@shibunkaku.co.jp](mailto:pub@shibunkaku.co.jp)

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

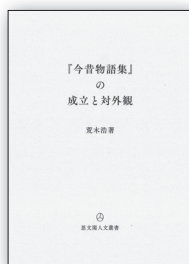


荒木浩（国際日本文化研究センター教授）著

【思文閣人文叢書】

# 『今昔物語集』の成立と対外観

A5判上製・四六〇頁／定価九、九〇〇円



平安末期に成立したとされる説話集『今昔物語集』と、その根幹的な原拠という11世紀の源隆国「宇治大納言物語」。対外観という視点のもと、古代説話集の成立から『今昔物語集』の生成へという文学史、仏教文化史の潮流を論じる。

仏教世界の起源である仏伝の中に、日本だけにしか存在しない仏の遺言を語り伝え、和語で描こうとすること、また阿倍仲麻呂帰国説の生成など――、あまたの画期的な物語行為はいかにしてなされたのか。

倉本一宏編

## 説話研究を拓く―説話文学と歴史史料の間に

説話文学と歴史史料の間を往還しつつ、説話研究に新たな地平を拓く。

定価九、九〇〇円

工藤美和子著

## 賢者の王国 愚者の浄土

―日本中世誓願の系譜―

日本浄土思想史に新たな知見を示す。

定価七、一五〇円

### 【目次】

はじめに――対象としての説話集史素描  
序論 仏教文学としての説話集と対外観

### 第一部 古代説話集の成立と対外観

第一章 仏教類書の影響と説話集の存立――「諸教要集」をめぐる  
第二章 「三宝絵」の捨身と孝――尊子内親王をめぐる  
第三章 投企される〈和国〉性

### 第二部 源隆国と「宇治大納言物語」――説話集と作者の環境

第一章 源隆国の才と説話集作者の資質――研究史再考から「宇治大納言物語」へ  
第二章 源隆国晩年の対外観と仏教――宇治一切経蔵というトポスをめぐって  
補論 藤原忠実の「家」と「父」そして「子」――言談・説話の中の院政期

### 第三部 『今昔物語集』の成立と宋代

第一章 『今昔物語集』成立論の環境――仏陀耶舎と慧遠の邂逅をめぐって  
第二章 『今昔物語集』の成立と宋代――成尋移入書籍と『大宋僧史略』などをめぐって

第三章 かへりきける阿部仲麻呂

第四章 『今昔物語集』の宋代観と和歌逸話の形成  
補論 編纂動機と逸話配列――紀貫之の亡児哀傷と『国文学史講話』をめぐる

終章 世界叙述と説話文学史――矜持する和語

大津透・池田尚隆編

## 藤原道長事典―御堂関白記からみる貴族社会

最新の研究成果にもとづいた  
新たな平安朝の貴族社会像を提示。

定価六、六〇〇円

三浦俊介著

## 神話文学の展開 ―貴船神話研究序説

【オンデマンド版】

貴船神話をモチーフとして、  
その伝承や資料から神話文学論を展開。

定価一三、二〇〇円

市川秀之（滋賀県立大学教授） 著

# 近代天皇制と遥拝所

5月刊行予定

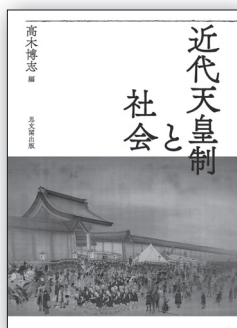
A5判上製・約二七四頁／定価九、九〇〇円

神社の境内などで見かける「遥拝所」と刻まれた石碑は、今日の我々の生活のなかではほとんどその意味を失っている。しかしながら、その石碑が建立された背景を探るなかで、この遥拝所碑は一九四五年までの日本人の生活と精神を大きく規制した「遥拝」の歴史を今も我々に伝えるものであることが明らかになっていく。本書は、遥拝所および遥拝儀礼の歴史をたどる中で、近代における民衆の生活文化と天皇制がどのような関係性を持つに至ったのかを具体的に明らかにすることを試みる。

高木博志編

## 近代天皇制と社会

A5判上製・五五二頁／定価八、〇〇〇円



### 〔予定目次〕

- 第1章 近代の遥拝と遥拝所
- 第2章 開港地の遥拝所
- 第3章 明治前期の東京府内の遥拝所
- 第4章 遥拝所と公園
- 第5章 開成山遥拝所
- 第6章 神宮教会と遥拝所
- 第7章 遥拝所の制度史
- 第8章 明治天皇の大喪と遥拝儀礼
- 第9章 遥拝をめぐる事件史
- 第10章 滋賀県東南部における近代遥拝所
- 第11章 奈良県下における近代遥拝所
- 第12章 昭和四年伊勢神宮遷宮とカトリック系学校における遥拝問題
- 第13章 宮城遥拝

天皇が国家の頂点に立った近代、天皇制は人びとにどのように受け入れられていったのか。

明治維新から戦後まで、現代の象徴天皇制へとつながる近代天皇制を、「社会」をキーワードに検討する意欲作。

表示価格は税込

## 快慶

——日本人を魅了した仏のかたち——

二〇二三年秋刊行予定

B4判上製・約五〇〇頁／定価 未定

園城寺監修／園城寺の仏像編纂委員会編

## 園城寺の仏像 第五卷

南北朝～江戸彫刻篇

二〇二三年秋刊行予定

A4判上製・約三〇頁・化粧函入／定価 未定

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一千二百年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ全五巻の最終巻。

南北朝～江戸彫刻を収録。図版はすべてカラー掲載。

二〇一七年に奈良国立博物館で開催された特別展「快慶——日本人を魅了した仏のかたち——」では、現在知られている快慶作品の約8割が一堂に会する史上空前の内容が実現した。この快慶展とその後調査で得られた知見を、快慶全作品の高精細写真とともに収録した快慶研究の決定版。

### 〔予定内容目次〕

中世後期以降の彫刻史研究

序

山本勉  
福家俊彦

図版

調書・解説

寺島典人（以下同）

コラム 護法善神像の幻の天衣

江戸時代の仏像

仏像銘文集成

付録 東京藝術大学所蔵の仏像古写真

〔シリーズ案内〕全五巻

第一巻 智証大師篇

第二巻 平安彫刻篇Ⅰ

第三巻 平安彫刻篇Ⅱ

第四巻 鎌倉彫刻篇

稲本泰生（京都大学教授）編

## 釈迦信仰と美術

二〇二三年夏刊行予定

A5判上製・約五五〇頁／定価 未定

釈迦の生涯を扱った仏伝美術を軸に、釈迦の「生」がいかに捉えられたか、南北朝～兩宋の中国に対応する時期の東アジアの事例を論じる。一方でインド・ガンダーラなど、その前史を構成する地域の状況も扱い、仏伝美術の形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上がらせる。また、近代日本画における理想的な仏陀の姿をめぐる論考など、今日へとつながる新たな研究視点を提示する。

古画備考研究会編

## 原本『古画備考』のネットワーク

江戸後期の知識人によるネットワークが日本の歴史に寄与した一端を解明する。

定価 一〇、二〇〇円

鄭銀珍著

## 韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム

浅川兄弟の活動を軸として、近代における韓国陶磁史の誕生を鮮やかに浮かび上がらせる。

定価 一五、四〇〇円

〔予定内容構成〕

### I 釈迦の生涯をたどる——仏伝と仏蹟巡礼の美術

いわゆる「仏伝なき仏伝図」に表現されたブツダと声聞衆（有部および大眾部）の仏身論について

南アジア初期仏教美術における聖地表象——仏伝図との関係を中心に

聖地と光の幻影——女神マリーチーをめぐる

ガンダーラ地方における初期の仏伝図の探究——ラニガト寺院址出土浮彫画像帯の分析から

安塞大仏寺四号窟における画像構成の意義と北朝期の仏伝表象

II 釈迦の姿をあらわす——仏のかたち人のかたち

佛從何出生——ブツダイメジの中国化と二元化

草座釈迦像とその儀礼——宋元江南仏教儀礼の中世日本への伝播

——休宗純賢「舌行釈迦図」（京都・真珠庵）の図像的淵源

天平様式観の形成——日本古典美術の構築と受容

III 釈迦の不在をこえる——涅槃表現の諸相

初唐期及び奈良時代の涅槃表象と涅槃観

京都国立博物館蔵釈迦金棺出現図に関する諸問題——主題の観点を中心に

「応徳涅槃図」再考——原本の存在とその絵画史的位置

達磨寺所蔵仏涅槃図考——釈迦の姿形と賛文を中心に

冷泉為人著

円山応挙論

冷泉家二十五代当主である著者の、美術史研究者としての集大成。

定価 一〇、四五〇円

島尾新・彬子女王・亀田和子編

## 写しの力——創造と継承のマトリクス

日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み。

定価 四四〇〇円

表示価格は税込

伊東史朗（和歌山県立博物館館長）著

# 神像の研究

3月刊行

B5判上製・三四四頁／定価 1,310円

神像とは神の姿をあらわす彫刻であり、御神体として尊ばれてきた歴史から、直接人目に触れる機会が少ない。仏像に比べ知られている作例が少なく調査の機会も限られてきた神像の研究は、仏像研究に比して遅れを取ってきたと言わざるを得ない。本書は、そうした状況を打破するべく、神像研究の基礎を築き、神像史を日本彫刻史の一分野として確立する試みである。

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

## 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究

大型図版で近世琉球の姿が色鮮やかによみがえる。定価 2,035円

尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編著

## 庭と建築の煎茶文化―近代数寄空間をよみとく

近代数寄空間を煎茶の要素からよみとく、新たな解釈を提示する。

定価 6,050円

〔目次〕

### I 神像彫刻を理解するために

- 1 神像の成立とその初期的展開／2 神像概論／3 八幡神／4 神功皇后／5 八幡若宮／6 童形神像／7 牛頭天王、大將軍神、天満天神／8 金剛蔵王と蔵王権現／9 隨身から門神へ

### II 神像各論

- 10 御調八幡宮の神像について／11 松尾大社神宮寺旧在三神像の神名／12 神像の成立過程からみた熊野速玉大社の神像群／13 石清水八幡宮から新出の木造重形像／14 木造鬼神像／15 立山信仰にかかわる資料群／16 瀬湖八幡神社の隨身像／17 香川・某神社の神像群二組／18 香川・田村神社の男女神像／19 広島・丹生神社の男女神像／20 淡路・伊弉諾神宮の女神像／21 河内・壺井八幡宮の八幡三神像と若宮像

### III 動物造形の諸相

- 22 師子・狛犬の成立、それ以前・以後／23 東寺伝来の師子・狛犬像／24 師子・狛犬像（東寺蔵）／25 手向山八幡宮狛犬像考／26 龍神の石造師子・狛犬像蔵／27 鳳凰 旧金閣附属

植木行宣監修／福原敏男・西岡陽子・橋本章・村上忠喜編

## 山・鉾・屋台の祭り研究事典

好評増刷

重要無形民俗文化財をはじめ、125の山・鉾・屋台の祭りを紹介。

定価 7,150円

八反裕太郎著

## 描かれた祇園祭―山鉾巡行・ねりもの研究

山鉾や神輿を描いた絵画作品から、その祭儀の変遷を読み解く。

定価 16,500円

表示価格は税込



洋学史学会 監修

青木歳幸／海原亮／沓澤宣賢／佐藤賢一／  
イサベル・田中・ファンダーレン／松方冬子

編

# 洋学史研究事典

B5判上製・五一六頁／定価 一四、三〇〇円

洋学史学会設立30周年記念出版

- ◎グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。
- ◎地方史誌類の編纂事業や地域史研究の隆盛を踏まえ、全国各地に蓄積された洋学史の研究成果を収録。
- ◎研究篇(グローバル)と地域篇(ローカル)、ふたつの視点からの複眼的な編集。
- ◎各項目は1頁もしくは2頁で構成され、簡潔に研究情報を把握できる。各項目末には参考文献を収録。
- ◎歴史研究を志す若い研究者はもとより、洋学史に関心のあるすべての方へ、これからの研究の指針となる必備の書。

## 〔予定目次〕

総論 洋学史研究試探

## ◆研究篇

現在の研究動向を反映した6章・181項目。  
洋学史研究の現在を知ることが出来る。  
「異国からきた召使い」「砂糖」など、従来は洋学史の範疇ととらえられてこなかったテーマも積極的に採用。

## ◆地域篇

- I 洋学の社会的基盤 (40項目)
- II 支えた人びと (20項目)
- III 影響を与えたモノ (36項目)
- IV 普及した書物 (28項目)
- V 研究教育の場 (21項目)
- VI 近世学芸から近代学術へ (36項目)

## ◆地域篇

47都道府県別に構成し、その地域独自の洋学史の特色を掘り起こす296項目。  
洋学の実態を深く関わった人物や史料肖像、画史跡文獻などにつき地域史の視点からとりあげる。

## ◆研究篇 I 洋学の社会的基盤

洋学関係史料・地域洋学史研究の先端を担う施設・博物館(洋学コレクション)を紹介。  
◆記録 洋学関係資料所在目録(113件)  
全国の図書館・博物館・資料館などから洋学関係資料の所在を記し、資料調査の便宜を図る。

人名索引(2400名超を収録)

## 〔本文見本〕



「異国からきた召使い」  
明治初期、日本に輸入された砂糖は、主にインドネシアやスマタラ、セイロン(現在のスリランカ)などから供給された。この砂糖は、日本の工業や貿易に重要な役割を果たした。特に、砂糖は製糖業の発展を促し、日本の経済成長に貢献した。また、砂糖は食料としても広く消費され、国民の生活に欠かせない物資となった。

## 研究篇 I 洋学の社会的基盤

### 「異国からきた召使い」

明治初期、日本に輸入された砂糖は、主にインドネシアやスマタラ、セイロン(現在のスリランカ)などから供給された。この砂糖は、日本の工業や貿易に重要な役割を果たした。特に、砂糖は製糖業の発展を促し、日本の経済成長に貢献した。また、砂糖は食料としても広く消費され、国民の生活に欠かせない物資となった。

## 地域篇 東京8

### 「江戸の蘭学塾」

江戸時代、蘭学塾は蘭学を学ぶための重要な場所であった。特に、蘭学塾では、蘭語の学習だけでなく、西洋の医学や科学の知識も習得された。蘭学塾の設立は、蘭学が一般化するきっかけとなった。また、蘭学塾では、蘭学を通じて、西洋の文化や思想も紹介された。

表示価格は税込

古画備考研究会編

# 校訂 原本 古画備考(全5巻)

2月刊行

A5判上製函入・総三三四頁／定価 七、〇〇〇円

岡倉天心の座右にもあった、江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。近代に編集された『増訂 古画備考』を大胆に革新。現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す、古画備考研究会による永年の成果がここに完結。

◎東京藝術大学附属図書館蔵、朝岡興禎編著『古画備考』巻一(四十八嘉永3=1850年起筆)を底本に、朝岡自筆の縮図、印章、署名等の画像とともに全翻刻、項目索引を付す。

◎原本に含まれない巻四十九(五十一)は東京国立博物館蔵『古画備考』(図書寮印本)を底本に同様の校訂を行う。

◎太田謹増訂本 明治36=1903年初版、明治45=1912年校訂増補第二版、弘文館刊／昭和45=1970年復刻、思文閣刊)と、その底本である東京国立博物館蔵本(図書寮印本)より校合を行いその校異を註に記載。

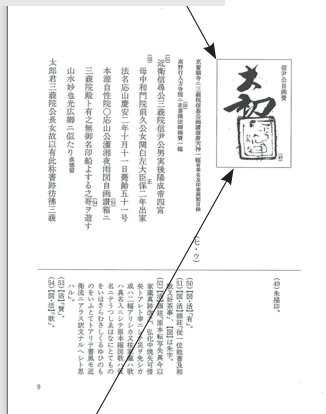
## 『古画備考研究会』

翻刻・校訂分担者：相澤正彦(成城大学)／五十嵐公一(大阪芸術大学)／井田太郎(近畿大学)／出光千子(青山学院大学)／出光美術館／北野良枝(元東京藝術大学)／高橋真作(文化財活用センター)／東京国立博物館／玉蟲敏子(研究会代表、武蔵野美術大学)／鶴岡明美(昭和女子大学)／並木誠士(京都工芸繊維大学)／成澤勝嗣(早稲田大学)／野口剛(根津美術館)／畑靖紀(九州国立博物館)／本田光子(愛知県立芸術大学)／宗像晋作(大分県立美術館)／山口真理子(城西国際大学水田美術館)／吉田恵理(静嘉堂文庫美術館)

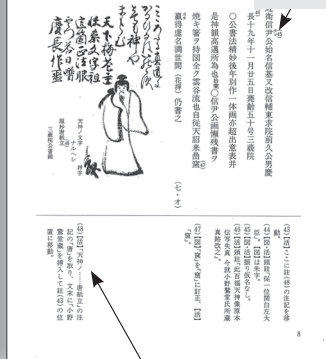
(以上、本書に関わるメンバーのみ。＊は編集委員、50音順)

## 【 組み見本：巻三 廷臣二 近衛信尹の項 】

増訂本では区別できなかった貼紙箇所を明示。



【翻刻】増訂本編集時に割愛されていた小字註など、丁寧に翻刻。増訂本では知りえなかった情報が掲載されている。



【画像】図、署名、印、画賛等の部分は、原本画像をそのまま掲載。原本に忠実なレイアウトを復原。

【脚註】図書寮印本、太田謹増訂本との校異を掲載。どのように校訂されたかが、簡潔にわかる。

表示価格は税込

藤木晶子（京都市立芸術大学非常勤講師）著

# 竹内栖鳳 水墨風景画にみる画境

3月刊行

A5判上製・三八二頁＋カラー口絵八頁／定価七、一五〇円



本書では竹内栖鳳の後半生の絵画創作について、水墨風景画の制作に焦点を当てて論考する。近代日本美術において栖鳳晩年の水墨風景画の絵画史上の価値を明示するとともに、これまで画家の前半期に集中していた栖鳳の画業の評価を再考し、彼の後半期の絵画創作の意義を提唱する。

〔目次〕

## 第一章 栖鳳晩年の水墨風景画の全貌

濃墨・破墨の画法と栖鳳作品／大正末期頃～昭和七年頃／昭和八年頃～昭和九年頃／昭和一〇年頃～昭和一六年／水墨風景画制作の変遷

## 第二章 「淡交会展」における挑戦

淡交会の特徴と意義／第三回淡交会展／第七回淡交会展／淡交会における出品画家の動向

## 第三章 潮来風景の写生取材の実態

写生帖の素描分析／藤岡鎮二郎の著述／竹内栖鳳の著述／写生取材から絵画化への推移

中川馨著

## 動物・植物写真と日本近代絵画

多彩な近代美術家たちと写真家との交流を浮き彫りにする。

定価五、五〇〇円

武藤夕佳里著

## 並河靖之と明治の七宝業

京都の七宝家・並河靖之と並河七宝を中心に、近代七宝業のありようを明らかにする。

定価九、九〇〇円

## 第四章 中国と潮来の風景表現の連繫

中国訪問と同地の風景画／中国風景画に辿る表現の契機／潮来風景画における表現の変遷／水墨風景画に至る絵画創作の展開

## 第五章 「栖鳳紙」開発と作画意図

日本画の基底材に関する動向／栖鳳紙の開発着手から完成まで／栖鳳紙に対する試験分析／紙本と絹本を巡る栖鳳の思索

## 第六章 近代水墨画と栖鳳の画境

近代の水墨表現の推移／東京画壇の水墨画／京都画壇の水墨画／南画系の水墨画／洋画出身者の水墨画／栖鳳の水墨画の位置付け

富坂賢・柏木智雄・岡塚章子編

## 通天楼日記―横山松三郎と明治初期の写真・洋画・印刷

黎明期の日本写真史・洋画史・印刷史の実態を明らかにする一級の史料群。

定価一八、〇四〇円

松原史著

## 刺繍の近代―輸出刺繍の日欧交流史

国内外の王宮をも飾る日本の近代刺繍が花開いたおよそ50年間を描き出す。

定価八、二五〇円

宮津大輔（横浜美術大学教授） 著

# 現代美術史における

## 前衛書のリポジショニング

——墨人会とその同時代表現をめぐる——

5月刊行

四六判・二七〇頁／定価四、九五〇円

【目次】

序章 本書のねらいと「書」の定義

### 第1部 「前衛書」の誕生と発展

第1章 「前衛書」誕生、そして墨人会結成へ

第2章 墨人会による「前衛書」の技法と思想的背景

第1部 註釈・引用 井上有一、森田子龍、江口草玄を中心に

### 第2部 「前衛書」が有する同時代性——墨人会と同時代表現

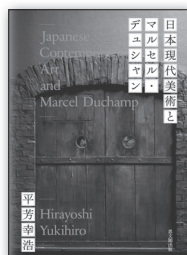
における共通点と差異を巡って

第1章 抽象表現主義——「前衛書」と同時代表現 その一

平芳幸浩著

## 日本現代美術と マルセル・デュシャン

A5判上製・三四八頁／定価八、八〇〇円



「前衛書」を、いかにとらえ直すべきか？

第二次世界大戦によって既存の価値観が覆される中で、世界の美術は「熱き抽象」へと向かう。

本書は、井上有一、江口草玄、森田子龍らの墨人会メンバーが、純粹な造形的原理と文字が有する意味表象が止揚する「美術としての『前衛書』」に至る道筋を、背景となる思想や社会状況から明らかにする。

さらには「書」と「美術」が東西の二項対立を越え、相互に影響を与えあった状況を抽象表現主義、アンフォルメル、具体美術協会などとの比較から論じることで、美術史における「前衛書」のリポジショニングを図るものである。

第2章 アンフォルメル——「前衛書」と同時代表現 その二

第3章 具体およびその他のムーブメント——「前衛書」と同時代表現 その三

第2部 註釈・引用

### 第3部 「前衛書」のリポジショニングとその未来

第1章 総括・「前衛書」のリポジショニング

第3部 註釈・引用

終章 「前衛書」から、「書」の未来へ

終章 註釈・引用

なぜこれほどまでに、日本はデュシャンを好んできたのか。実物が眼前にないままに、その影だけを追いながら作品と言説が積み上がる日本のデュシャン受容の様相は、西洋化と土着化とに分裂しながら突き進んだ日本現代美術の姿を映す鏡となる。

表示価格は税込

アルバロ・エルナンデス（関西学院大学講師）編

## メキシコ漫画 イストリエタ

—民俗文化としての漫画表現—

4月刊行

A5判並製・四〇〇頁＋カラー口絵八頁／定価七、二六〇円



日本においてメキシコ漫画「イストリエタ」を初めて本格的に紹介し、かつイストリエタ研究のための重要なテーマや作者に関する一次資料も提供する。

社会のなかで、大衆の生活や思想と深く結びついて描かれ、受容された民俗文化の表出としてのメキシコ漫画のあり方を紹介し、イストリエタ研究の先駆者バルトラ氏、アウレコエチエア氏、イストリエタ博物館館長ソト氏による主要作品の解説のほか、国際比較研究の視点をふまえた国内研究者の論考を収録。

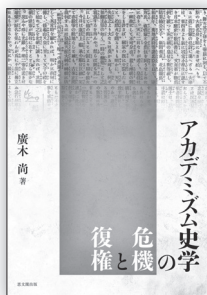
また京都国際マンガミュージアムで開催された『メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」展（2019年12月～2020年2月）の成果も含む。

廣木尚（早稲田大学講師）著

## アカデミズム史学の 危機と復権

3月刊行

A5判上製・二七二頁／定価九、三三〇円



近代日本の歴史研究において、中心的存在であったアカデミズム史学は、いかなる時代状況のなかで生まれたのか。他の学問との競合、研究と教育のジレンマ、国家や社会との緊張関係——「国体」を正当化することと「科学」であることという二つの任務を負わされたアカデミズム史学は、南北朝正間問題という危機を経て、ある結論にいたる。坪井九馬三、黒板勝美らアカデミズム史学に連なる歴史家たちの実践から、無思想ともみなされてきた存在の思想性に迫る。

表示価格は税込



川岡勉 (愛媛大学教授) 編

# 中世後期の守護と 文書システム

1月刊行

A5判上製・五七六頁／定価 二、一〇〇円

東寺文書研究会編

## 東寺執行日記 第一巻

3月刊行

A5判上製・三〇〇頁／定価 一五、四〇〇円

京都府立京都学・歴史館編

## 百合文書 十四 又函二

『大日本古文書』には未収録の「カタカナ之部」を翻刻。

定価 一四、八五〇円

[Shibunkaku Works]

菅田祐準著

## 西山証空上人とその思想

証空上人の生涯とその思想・足跡を辿る。

二〇二二初夏刊行予定

定価未定



中世後期の守護とは何であったか。守護による分国支配は、諸国の地域的特質に規定されて一律に論じられない多様性を持っている。複数の守護家とその受発給文書を相互に比較・検討しながら、守護権力の地域的な差異や、各国・各守護家の特質、そのあり方を全国的規模で把握する。

執行は長官僧である東寺長者系列の寺内の要職。堂舎・仏像・各種儀式の法具などの管理・保全の責任者であり、寺内の庶務を担当した。本

日記はその公務記録で、鎌倉時代末期から近代にいたる長大な記録が残る。当該期の政治・社会の中心である京都政界・社会に関する、長期にわたる定点観測の貴重なデータを提供する。全三巻。

上島有・大山喬平・黒川直則編

## 東寺百合文書を読む

―よみがえる日本の中世―

中世文書を読み解くための格好の入門書。

定価 二、七五〇円

東寺文書研究会編

## 東寺文書と中世の諸相

東寺文書に魅せられた中世史研究者による研究成果。

定価 二、一〇〇円

表示価格は税込

沓澤宣賢（東海大学名誉教授）

ヘーター・パンツァー（ボン大学名誉教授）

宮田奈々（ウィーン大学研究員）

編

# 1873年ウィーン万国博覧会

——日奥からみた明治日本の姿

4月刊行

A5判上製・三三〇頁／定価九、六八〇円



博覧会場本館の日本展示  
（『奥国博覧会参同記要』より）

オーストリア・日本双方の視点、日本政府に関わった外国人の視点から日本のウィーン万博参加を複眼的に検討することに加え、各分野で進む最新の研究を集成することで、従来の「殖産興業政策への貢献」という評価にとどまらないウィーン万博像を描出する。

佐野真由子編

## 万博学

万国博覧会という、  
世界を把握する方法

B5判上製・五五六頁／定価九、三五〇円

佐野真由子編

## 万国博覧会と人間の歴史

万博から、人間の歴史が見える！

定価一〇、二〇〇円

寺本敬子著

## パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生

日仏の史料を駆使し、  
ジャポニズムの誕生を解き明かす。

定価七、一五〇円

## 万博学

佐野真由子編

万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能になる、大きな学際的人間学の営みである。  
32本の論考で、万国博覧会のさまざまな側面に着目し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。万国博覧会とは「世界を把握する方法」なのだ。

ジャポニズム学会編

## ジャポニズム入門

各国別の個性的な展開をやさしく読み解き、  
ジャポニズムの全体像に迫る。

定価三、〇八〇円

並木誠士編

## 近代京都の美術工芸——制作・流通・鑑賞

近代京都の美術工芸作品や資料の評価、  
位置づけを問い直す19篇

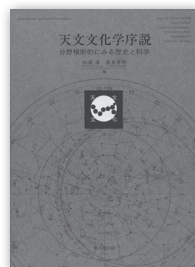
定価一、二〇〇円

表示価格は税込

松浦清 (大阪工業大学教授・真貝寿明 (同) 編

# 天文文化学序説

分野横断的にみる  
歴史と科学



A5判上製・三九四頁／定価一〇、四五〇円

## 「目次」

『天文文化学序説』の刊行に際して

**Patch: 絵画作品にみる天文**

愛染明王と星宿——香雪美術館蔵「愛染曼荼羅図」について

庚申信仰と中世の靑面金剛画像

久保田桃水 (雪之図) の写生的風景——月を描く絵画の構図に見る時間解釈を中心に

〔研究ノート〕東東洋筆「河図図」についての考察——養賢堂学頭・大槻平泉の講堂建築構想と絵師・東東洋の画業における位置付け

**Patch: 文学・信仰としての天文**

日本神話の星——聖なる中心を表わす北極星、天空神伊邪那岐命の太刀が星座となった天之尾羽張神

門田誠一 (佛敎大学名誉教授) 著

# 出土文字資料と宗教文化

【佛敎大学研究叢書】

A5判上製・三六三頁／  
定価九、三五〇円

発掘調査によって出土した考古遺物から、  
仏敎・儒敎・神祇信仰・陰陽道など諸宗教  
の古代の姿や信仰の実修を考察。遺跡の種  
類や意味、出土状況等を考察する考古学と、  
資料に記された文字を読み解く文献学、ふ  
たつの知見で古代文化に迫る。

天文現象は文明の誕生以来、生活に密接に結びついた知識として  
実用的な学問を成立させ、生活を精神的に支える宗教を創出し、生  
活に潤いを与える多くの芸術を生みだしてきた。一方で、現代の  
学問としての天文学は、学問として細分化されすぎてしまった面  
もある。本書では『天文文化学』と命名する文化史・科学史の融  
合分野の創設を志し、文理にまたがる視点からの論考を掲載する。  
この試みをどこまで広げていけるのか、可能性を探る書である。

日本古代の星辰信仰——文献・出土資料からの検討

『悉路ゆかしき大將』巻一の制作背景をめぐって

法輪寺と「星の光」詠を手がかりに

江戸・明治の科学書を中心に見た双子宮の名称と定着

〔研究ノート〕巨石と天文現象——アステリズムを探して

**Patch: 近現代科学でとらえる天文**

近代物理学との邂逅——麻田剛立、本木良永と志筑忠雄

宇宙物理学で見る宇宙と人類の地平

〔コラム〕超新星出現の目撃者

人々は空を見て何を思うか

——天文と歴史を科学コミュニケーションでつないで考える

天文文化学の目指すもの——理系出身者の視点から

(山下克明)

(横山恵理)

(米田達郎)

(神羽麻紀)

(真貝寿明)

(鳥居 隆)

(作花 一志)

(玉澤春史)

(真貝寿明)

田島公（東京大学教授）編

## 禁裏・公家文庫研究 第八輯

4月刊行

B5判上製製函入・四三六頁／定価一六、五〇〇円

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第八輯。

【目次】  
序——二十二年間にわたる大型科研費を終えるにあたって

(田島 公)

## 第一部

東アジアの目録学伝統と近年における日本の前近代文庫研究

(ジェイソン・ウェット)

## 第二部

讃岐国司解端書（いわゆる「藤原年中申文」）の再検討

(小倉慈司)

明治大学図書館所蔵三条西家旧蔵本『除秘鈔』の基礎的研究

(田島 公)

非摂関の太政大臣——九条家本「被任太政大臣其嗣以他人任大臣例」から

(小塩 慶)

『水落地蔵』の納入品からみた鎌倉初期の東国と東北

(川尻秋生)

愛知県津島市西光寺所蔵地蔵菩薩立像を中心として

(新井重行)

松園斉著

## 中世禁裏女房の研究

A5判上製・五五二頁／定価八、八〇〇円



## 第三部

宮内庁書陵部所蔵九条家本『春日行幸類記』・『石清水八幡宮并賀茂社行幸記』

(太田克也)

—「中右記」・「永昌記」抜書

(藤原重雄)

宮内庁書陵部所蔵九条家本『定能卿記部類』二「臨時行幸上」

(海上貴彦)

九条道家筆『春除目次第』の紹介と翻刻

(三島曉子)

東山御文庫「琵琶相承系図」について 附翻刻

(遠藤珠紀)

『院中御湯殿上日記』（天正一十六年七月・八月記）の紹介

(小倉慈司編)

## 第四部

東山御文庫本マイクログラム内容目録（稿）(3)

(小倉慈司編)

中世という激動の時代、翻弄される朝廷を支え、中世文学の担い手として活躍した禁裏の女房たちの実態に迫る。さまざまな文献資料を渉猟し、丹念に繋ぎ合わせることで、一人ひとりの軌跡を追い、さらにその全体像の復元を試みた労作。

# 学術書の 企画を 公募いたします

本格的な出版事業に乗り出して半世紀、  
小社では、歴史学や国文学、美学美術史  
など、学術書や史料集ほか、多岐の分野  
にわたり数多くの書物を世に送りだし、  
研究者の皆様の成果公開のお手伝いをし  
てまいりました。

今では貴重な史料や美術品も含め、デ  
ジタル化された様々なコンテンツがイン  
ターネットを通じて、いつでも、どこで  
も、閲覧できるようになりましたが、紙  
媒体の書籍を作る意義はどこにあるのか  
を考えたとき、私たちは出版理念として  
次の3点に行きつきました。

## ◆高い学術的価値を有するもの

先端的でオリジナルな研究成果を  
まとめたもの  
複数の研究領域で参照、評価され  
るもの

## ◆後世に残すべき文化的価値を有するもの

時代を超えて基本図書となる水準  
を有するもの  
従来の枠組み、常識に再検討を迫  
るもの

## ◆弊社として世に問いたいもの

日本の優れた文化を育み、伝え、  
広める、思文閣グループの使命に  
適うもの  
書籍としてのテーマ・論旨が明快  
なもの

小社では、以上の理念にかなう出版企  
画を日々探しておりますが、埋もれた良  
質な研究もまた多いことと存じます。そ

こで広く皆様から企画をお寄せいただき、  
世に問うお手伝いをしたいと考え、出版  
企画の公募をすることにいたしました。

- 企画案として内容の分かる概要書をお  
出しください（フォーマットがあります）
- 応募期間は2022年4月15日～20  
22年6月30日といたします。

詳細は左記QRコードからご確認  
ください。

研究者としての実績や経験年数、  
年齢等は全て不問です。既存の学  
問領域や学説にとらわれることの  
ない、新たな企画を歓迎いたしま  
す。皆様からのご応募をお待ちい  
たしております。



株式会社思文閣出版  
新刊事業部



思文閣グループの  
逸品紹介

# 美の縁



丹緑本

保元・平治物語

六冊

『保元・平治物語』は、保元の乱・平治の乱の顛末を和漢混交文によつて描いた軍記物語。

丹緑本は寛永から万治（一六二四～一六）にかけて刊行された、墨刷の挿絵に特色のある筆彩色を施した版本である。彩色は丹（朱）・緑青・黄の三色が用いられ、主に丹と緑が多用されていることから、近代になり丹緑本と呼ばれるようになった。古くは「ゑとり本」と呼ばれていた。出版の中心が京・大坂にあった時期に製作されたため、伝本は上方版に限られている。

本書は寛永三年（一六二六）版行の『保元・平治物語』の丹緑本である。丹表紙を付し、「保元 壹（一・三）」「平治 二（二・三）」「平治」の巻一は題簽欠と書かれた小型の題簽を貼付する。挿絵は全て半葉図で、『保元物語』三十五図、『平治物語』三十七図の計七十二図に及ぶ。いずれも色合いが良く、丹緑本独特の筆致は素朴で趣深い。一部に浸み跡がみられるが、軍記物の丹緑本は稀であり、その伝本は、公的機関では数点を数えるのみと思われる。

本書は、その稀覯性は言うに及ばず、彩色によつて視覚効果を高め、のちの多色刷版本の誕生を促した丹緑本として、出版史上画期的な本といえよう。

（思文閣出版古書部・永井恵）



我々思文閣は日本の優れた文化を  
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に  
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU  
**思文閣**

京都市東山区古門前通大和路東入元町355  
**TEL (075) 531-0001** FAX (075) 531-5533  
<https://www.shibunkaku.co.jp/>  
[info@shibunkaku.co.jp](mailto:info@shibunkaku.co.jp)

## 思文閣古書資料目録



魚絵合わせかるた 一組

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・  
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており  
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問  
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和路東入元町355  
**TEL (075) 752-0005** FAX (075) 525-7155  
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>  
[kosho@shibunkaku.co.jp](mailto:kosho@shibunkaku.co.jp)

 思文閣公式 Instagram



個展・企画情報等、随時更新中  
**@shibunkaku**

SHIBUNKAKU  
**思文閣**



ぎやらい思文閣では、絵画・陶芸など  
様々な展覧会を開催いたします。  
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

**ぎやらい思文閣**

京都市東山区古門前通大和路東入元町386  
**TEL (075) 761-0001** [gallery@shibunkaku.co.jp](mailto:gallery@shibunkaku.co.jp)  
[www.shibunkaku.co.jp/gallery/](http://www.shibunkaku.co.jp/gallery/)